思い出の統計調査官 前田正久さん

澤井　章*

7月24日に78歳で逝去された元統計調査官前田正久さんの追悼文を書くように言われて，部下としていろいろご指導を頂いておりましたので，謹んでお受け致しましたが，いざ書こうとすると，こんなに知らないことが多かったのかと思うことしきりで，お元気な間にもっといろいろ伺っておけばよかったと先に立たない後悔をしております。

海軍中尉　前田正久

前田さんが，前田海軍という愛称で親しまれていたことは多くの人の知るところです。ところが，どうして前田さんが海軍に入られたのか，中尉という位はどの時点のものか（所謂ポツダム中尉なのか，大体ポツダム中尉というのも一体何なのか）判りません。

前田さんが学校を卒業された時は21歳になっておられましたから，多分在学中は兵役猶予，卒業と同時に応召ということではなかったのかと想像するのですが，何故海軍であったのかが判りません。前田さんは海のない長野県の生まれなので，海への憧れが海軍に進ませたのかなとも思いますが，本当のことは判りません。ただ海軍の軍人であったことには強い誇りを持っておられ，お書きになったものにも一端が伺われます（防衛庁に訊きましたら，海軍は全部志願で来たのだそうです）。

数理技官　前田正久

前田さんは，除隊後長野県庁に勤務され，厚生省に移管されたばかりの人口動態統計に関する業務に従事されましたが，事務打ち合わせ全国会議の席上で，厚生省の担当官へ随分キツイ事を言われ，それが却って「彼奴は仲々骨のある奴だ。」ということで，厚生本省へ招聘されたようです。私には，当時の公務員制度のことはよく判らず，技官とか事務官とかいう割り振りのことも不案内ですし，前田さんの技官任官や，その後数理的業務に従事されるようになったのも経緯は知りません。ただ，前田さんが東京物理学校で受けられた数学の講義は，寺澤寛一著「自然科学者のための数学概論」をテキストとするもので，担当教官から，成績抜群と称賛されたということです。また，戦後の統計行政改革の一環で，占領軍の意向により，当時の行政管理庁が人材確保のため，幹部職員の試験をしたそうです。前田さんは，この試験にも好成績を取られたそうです。

統計は不遇な学問で，カッコ悪い学問だという風潮が今でもあるように思いますが，そんな環境の中で努力された前田さんは，偉いものだと思います。当時は統計の本も少なく，我々の先輩は，悪い悪い紙のガリ版で印刷した教材で勉強しておられ，頭の下がる思いが致します。

実務派，現実派

前田さんは数理技官のボスであるにも関わらず，一部数理技官が陥りがちな空理空論を弄ぶことから全く自由でした。というよりは，現実的，実際的に考えるところに前田さんの真骨頂があるように思います。昭和41年生活総合調査報告書が当初原案よりすっきりした形で纏まっ

＊全国労働者共済生活協同組合連合会共済計理人

たのは，その一つの例でしょう。

現在，統計学の入門書は巷に氾濫しております。しかし，その多くは高遠な理論を顕示して実務家の役に立ちにくい，もっと実務家の役に立つテキストが作れないものか，それを使って地方で統計実務に従事している人のための講習会を実施したい，というのが前田さんの考えであったようです。検定論を入れるかどうかなども随分議論しました。輔弼の任を全うせず，突っかかってばかりいたことを今になって申し訳ないと思っております。

統計実査については，自ら頼むところ少なからずだったと思います。私が拝聴した統計実査の講義も大したものでしたが，中鉢正美先生(慶応義塾大学）をチーフとする掛川市，北会津等における世帯調査には，その力量が遺憾なく発揮されており，「家族周期と児童養育費」等の4部作となっております。調査内容もさることながら，びっくりしたのは調査票の回収率です。

それだけに，掛川市には思い入れが深かったのでしょう，後年私が森の石松の墓に詣でるため掛川市へ行ったおり，掛川の領主が山内一豊であったことを知ったと報告したら，大層喜ばれました。

実際派，現実派（生活面）

己の如く隣人を愛する，など我々のような凡人にはとてもできません。前田さんは後進の指導に随分意を用いられましたが，非現実的な説教はされませんでした。

私が学校で教わった人倫の道は，柳の枝に跳びつく蛙の話とか，茶坊主に頭を殴られてもじっと我慢する木村重成の話でした。人間の努力や我慢には限度というものがある，世の中には方便というものがあるというのが前田さんで，これなら誰でも納得できます。

忠臣蔵で一番悪いのは腕が鈍な浅野内匠頭，その二は吉良に贈り物を吝嗇った赤穂藩江戸家老だと言ったら，その通りと言って下さいました。私など随分訓戒を受けた方だと思いますが

・会議には筆記具を持って参加せよ。
・留守中に電話があったら「澤井はいません」と言わせよ（おられません，は不可)。
・帰る人には「お疲れ様」（ご苦労様は不可）
・上司の前で腕まくりはいけない。

等。こういう注意をしてくれる人は滅多にいません。

反骨の人

昭和35年安保反対闘争の真っ最中，前田さんは輝ける全厚生（厚生省職員の労働組合）の書記長でした。委員長は後に中鉢チームでも一緒に仕事をされた栄養研究所の長嶺晋吉さんで，長嶺さんに心服しておられました。代議員会で安保反対をどう闘うか，闘わないかで白熱の論戦が行われたとき，前田書記長は熱心に本部提案を説明されました。これを，全厚生機関誌は「前田書記長が巧みな話術で」代議員を説得したと報じたところ，これでは如何にも口先でだまくらかしたようではないか，と不快の色を隠されませんでした。私は，こんなところにも前田さんの人柄が現れているように思います。不快な時は真面目に怒る，ということは大切なことです。当時前田さんは課長補佐で，勤務時間内に食い込む職場大会の責任者として訓告処分を受けられました。

蛇足ながら，前田さんの雄弁は夙に有名で，厚生省のデモステネスと称した人もいました。

anti-Bacchus

競馬はやる，麻雀はやるが酒は呑まない奴に碌な奴がいるか，と言う話を伝え聞いてか，退官後に少し修行されたようです。

「わたしも腕が上がったよ，澤井君」と自慢されましたが，ビールは小瓶1本でした。ビールは酒ではありません。

医療業は人間の医療，水道業は人間の飲料水を提供する事業。産業分類のために努力された前田さんがビールと酒との区別もされないとは名人の手から水が洩れました。

統計マンとしての数々の業績を述べる余白が無くなりました。その方は本誌昭和54年1月号を見て下さい。